黒猫になっちゃった！

kana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫になっちゃった！

【Ｎコード】

Ｎ６２０６Ｗ

【作者名】

ｋａｎａ

【あらすじ】

飛島（とびしま）　明日香（あすか）　十六歳　飼っていた黒猫を庇って死亡。だけど黒猫のクロと融合して異世界に飛ばされました。

今私は、黒猫として人間として異次元で強く生きていきます。

序章

私の名前は飛島（とびしま）　明日香（あすか）。十六歳、花の女子高生。
それはついさっきまでのこと……
今は――――なんと黒い猫。

とある住宅街でその事件が起こったの。
一般的に事件とは言わないのだろうけど、私にとっては大事件だった。

タイヤと路面が擦れる甲高い摩擦音の後に、何かにぶつかる音、その後直ぐに電信柱にぶつかる凄まじい衝撃音が辺りにこだました。
速度違反さながらの車が急ブレーキを踏み、そのまま電信柱に突っ込んだのだ。

赤いスカーフが風に舞いながら緩やかに地面に落ちてくる。

車はボンネットがひしゃげ、そこから水蒸気を含む薄白い煙が噴出している。電信柱も心なしか曲がっているように見える。
運転手はエアバックと座席のシートに挟まれ気を失っているようだ。

通行人や近所の住人らしき者達が野次馬の如く集まってくる。
悲鳴をあげる者、「救急車を呼べー！」と叫ぶ者、「大丈夫か！？」と声を荒げる者。辺りは騒然としていた。

赤いスカーフが舞い落ちた場所には、――――1人の少女が身を丸くして横たわっていた。
その身体の下から、見る見る赤い液体が拡がっていた。

身を丸くして横たわる少女の腕の中から、小さな黒い猫が、自身も怪我をしているのか、よろよろと這い出すように出てきた。
どうやら少女はこの黒猫を庇って車に轢かれたのかもしれない。
黒猫は「ミャァー」と小さな声で鳴くと、その少女の頬を舐めている。なんとも切ない鳴き声だった。

そんな情景を上から見下ろす少女がいた。
そう、それが私、飛島（とびしま）　明日香（あすか）。
そして眼下で横たわるのも、わ、た、し……

私はどうやら交通事故で死んじゃったようです……
クロが急に道路に飛び出して、車が突っ込んできて、気が付いたら私も飛び出してたの。
あぁ、クロって私の愛猫のことね。

でもクロは助かったんだ……　よかった。
これでクロまで死んだら、私は『無駄死に』だもんね？
って思ってたら頭の中に声が聞こえてきたの。

『アスカ。ごめんニャ……』って。
「ええっ？　ごめんニャ？　『ニャ』って……　まさかクロなの？」
『そうニャ……』
「そうニャって。なんで話しできるの？」
『ん～それはニャ、って今はそんなことどうでもいいニャ。とにかく今は早くしないと不味（まず）い事になるニャ』
「まずい？　なにが？」
『ニャ～～～、それはニャ、あすかの身体は死んだニャ』
「うん、見ればわかるよ？」

『ぼくの身体は、まだ生きてるニャ』
「うん、それも見ればわかる……　ってかあんたメスでしょ？　なんでぼく？」
『ニャァァァァ1～　そんなことどうでも良いニャッ！』
「はっははっ……　だね、ごめんね」
（そんなに怒らなくてもいいじゃん……グスン）
『だからニャ、今ならぼくと融合したら、アスカは助かるニャ』
「へ？　そうなの？　って融合ってなに？」
『相変わらず質問が多いニャ……』
「……スミマセン……」
『とにかく、助かる為には融合しかないニャッ！』
「うん……？」
『相変わらず理解悪いニャ……』
「はぅ……」
『で、融合するニャ？　しないニャ？』
「えぇぇぇ　わかんないよぉぉ」
『早くしないと時間軸がずれてしまうニャッ！』
「よけいわかんないよぉ～」
『困ったニャ。時間ないニャ。早く決めるニャ！』
「えっと、えっと……　く、クロはどうしたら良いと思う？」
ニャクッ！（ガクッ！）
『ニャァァァーッ！、もう間に合わないニャッ！　ぼくが決めるニャ？　それで良いニャ？」
「う、うん。おねがい」
『後で怒るの無しニャ？　ご飯抜きとか無しニャ？　お風呂とか無しニャ？』
「う、うん。わかった……」
『ニャニャニャ？　駄目ニャァァァ！　ええぃ。一か八かニャ。融合ニャァァァッー』

眩い光が辺りを包み込んで視界が真っ白になっていく。
私はあまりの眩しさに目を閉じたわ。そして意識が遠のいていったの。
あぁぁぁーーー落ちるぅぅぅーって感じ？
で、気が付いたら私の身体がクロになっての……
たぶんだけど、クロとフュージョンしちゃったのかな？
べつに、フューーーージョンッ！　とか言ってないけどね……

『アスカ？　聞こえるかニャ？』
「うん、聞こえるよ？」
『どうやら融合は成功したニャ……』
「うん、みたいだね……」
『だけど、間に合わなかったニャ……』
「そ、そうなの？」
『見れば分かるニャ？』
「ん～、わかんない……」
『にゃぁぁぁ……　時間軸がずれちゃったニャ』
「そっかぁ……」
『緊迫感無いニャ？』
「だめ？　だって……　よくわかんないし……」
『見たら分かるニャ。時間軸がずれたから異世界に飛ばされたニャ……』
「い、いせかい？」

そして私は異世界に飛ばされました。
黒い子猫として。

異世界にて

真っ青な雲ひとつ無い空。四方を見渡せば地平線が見渡せる大草原。
たまに吹く風が草原をさざ波の様に波打たせている。
「なんて気持ち良いんだろう」
『……』
「クロ、気持ち良いよね？」
『……』
「あれ、クロいないの？」
『いるニャ……』
「もーーう、ビックリするじゃないっ！　なんで返事しないのよっ！」
『アスカは能天気で良いニャ……』
「はぅ――――いじわる……」

そうだった、私たちは異世界に飛ばされちゃったのよね。
さらには、前後左右どっちを見ても草草草草……　遥か先まで広がる大草原のど真ん中に1人と1匹。いや正確には1匹なのかな……　私の身体は無いんだしね。テヘ！
『テヘ！　じゃないニャッ！』
「えええぇ、なんで、私声だしてた？」
『出さなくても聞こえるニャ』
「そ、そうなの？　じゃ、じゃぁ、人の思考の中に入らないでよっ！」
『聞こえるんだから仕方ないニャ。ってかぼく達が会話するのに声出す必要なんか無いニャ』
「え？　そうなの？」
『だから声出さなくていいニャ……』

（そっかぁ　便利なんだか不便なんだか、迂闊に考える事も出来ないね……）

『とにかくにゃ、日が暮れる前に何処か泊まれる所見つけないと駄目ニャ』

「そ、そうよね」

『声出さなくても良いニャ……』

（はぅ……　ごめん）

じっとたたずむ１匹。
さらに動かない１匹。

『……』

（……）

『……』

（……えっと、どうしてじっとしてるの？）

『アスカが動こうとしないからニャ』

（ぇ？　だってこの身体はクロの身体でしょ？）

『今はアスカの身体ニャ。ぼくはアスカに助けられたニャ。だからアスカにぼくの身体をあげたんニャ』

（えぇぇぇー、そうだったんだ……　なんか――ごめんね……）

『気にする事ないにゃ。アスカが助けてくれなかったら、ぼくは死んでたニャ。身体はアスカの物だけど、ぼくはこうしてアスカと話しも出来るし、幸せなのニャ』

（あぅー　やっぱりクロ大好きだよぉぉぉ）

『自分の身体を抱きしめるって、起用だニャ……』

（……）

『まぁそれに、いざって時は自分でも動かせるニャ。ふだんは面倒だからアスカに任せるだけニャ』

（そっちが本音ね……）

『ニャァァァァァァァ』

そして私達、いや私は、草原を只ひたすら真っ直ぐ歩いています。
だってクロが言うには、ここは異世界と言うだけで何処か全然分からないらしの。
季節もわからない。そもそも季節があるのかも疑問なんだけどね。
それに夜と言うのが来るのかどうかも分からないって事だったけど、頭上の太陽？　がじわじわと動いてるから夜はたぶん来るらしいのよね。ってことは夜になると多分冷え込んでくるからそれまでに夜露がしのげる場所を見つけないと凍えるかもしれないってこと。それと――これはあまり考えたく無いんだけど、どんな凶暴な生物がいるか分からないらしいの……

走って走って疲れたら歩いて休憩して、そしてまた走って。数時間それを繰り返したかしら？　まだ遥か前方に見えるだけだけど、森か林が見えてきたわ。
（ねぇ、あの森？　林？　に行って見ようか？）
『ん？　良いけどニャ……』
（な、なによ、そのはっきりしない物の言い様は？）
『森ニャよ？　なにがいるか分かんにゃいニャよ？』
（あ、そっかぁ……　じゃ――――　やめよう）
『って、急に方向変えるんじゃ無いニャッ！』
（だってぇ。怖い怪獣とか出てきたらどうするのよぉ）
『そん時は、ぼくに任せるニャ！』
（か、怪獣だよ？）
『ぼくはただの子猫じゃないニャ！』
（そ、そうだったの？）
『……ただの子猫に融合とか出来ると思ってたニャか？』
（そ、それもそうよね……）

そうして私は森に向かいました。

遠くから見てたときは分からなかったけど、近くで見るとやたらと不気味です。
鬱蒼と茂る針葉樹でしょうか？　まだ太陽は上空で輝いていると言うのに、森の中は薄暗く
奥のほうは全然みえません。まだ森の入り口だと言うのに、なにやら奇怪な声が聞こえます。
（ねぇ、あの不気味な声なに？）
『ん？　なんか聞こえたかニャ？』
「クェェーー」
（ほらっ！　今くえーって……）ガクガクブルブル。
『……ただの鳥の声ニャよ……』
（ガクッ！）
『怖い怖いと思うから駄目なのニャ。』
（はい、スミマセン……）

森の中に入ると更に暗さを実感しました。太陽の光は僅かに枝葉の間から漏れる程度。そして温度も数度下がった気がします。とても肌寒いんだもん……　さらにホントに鳥の声なの？っていう不気味な鳴き声、たまに藪の中から聞こえるガザガザって音も恐怖心をそそります。
それにね――――猫の身体って目線が低すぎるのよぉぉぉ。だってだって、虫がすぐ近くに見えちゃうんだよ……グスン。
『煩いニャ……』
（はぅ）

私は出来るだけ下を見ないように目線を上に向けて歩きます。
（下はクロに任せるね♪）
『……』
森の中を数十分歩きました。前方の巨木から突如大きな影が……
（く、く、く、く……）

『声だすんじゃないニャよ！』
（う、うん、てか、こっち見てるよ――あの熊……）
『わ、分かってるニャ。ゆ、ゆっくり後退して逃げるニャよ』
（クロ、どもってるわよ……）
『う、煩いニャ！』
（ってか、熊は死んだふりだよね？）
『馬鹿かニャッ！　それってただの俗説だニャ、ほんとは食べられちゃうニャよ』
（えぇぇ、そうなの？）
『早く逃げるニャ、近づいて来たニャ！』
（だ、だめ……　足がすくんで動かない……）

森の中

私はもう死んだと思ったわ。1日に2回も死ぬなんてよっぽど私って不運なんだなって。さらにはね。このまま死んだら熊さんと融合しちゃったりして……　もふっ。とか……

でも、やっぱり食べられるなんて嫌よね？　骨がバキバキって……　冷や汗タラー。

想像したら走ってたわ。

それはまさに脱兎の如くね。

『猫が脱兎って変ニャ……』

（じゃ脱猫（だっぴょう）？）

『……』

とにかく私は走ったわ。木にぶつかって引っくり返ったりしたわ。それでも直ぐ立ち上がって走った。走って走って枝に顔面をベチィッって……　そりゃもう涙がボロボロでたわよ。でも直ぐ走り出したわ。木の根に脚を引っ掛け前転、前転、開脚前転、M字開脚……

……

まぁ身体が猫でよかったわ。

『よくないニャッ！』

（だから人の思考に入らないでよ……）

でも気が付いたら熊さんは居なかったわ。

でも完全に迷ったわね……

周りを見渡しても雑草や生い茂る藪、延々と続く針葉樹。

なんかさっきより暗さが増した様な気がするよ？

温度もさらに下がった気がする。

『森の奥に入って来てしまったニャ』

（出口ってどっちかしら……）
『ニャァァー　分かんないニャー』
（じゃぁ……今何時ごろかしら？）
『時間が分かっても、１日２４時間とは限らないニャ。意味ないニャ』
（そ、そうなのね……）

（ってか、あんた怪獣でも任せろって言ったわよね？　なんで熊で逃げるのよ？）
『熊は大きすぎるニャ！　どうやって猫が熊に勝てると思うニャ？』
（はぁ？　怪獣よりちっちゃいじゃん？）
『何言ってるニャ？　怪獣はちっちゃいニャ』
（言ってる意味わかんないんだけど？　あんた怪獣みたことあるの？）
『怪獣は見たことあるニャ。子供が怪獣持って遊んでたニャ。ちっちゃいニャ』
（……）

そんな無駄な会話をしているその時だったわ。
ガサガサッ！
「キャッ！」
『声出すなニャ！』
（だ、だって、あそこの藪の中、なんか居るよ？）
私は前足で数メートル前方の藪を指差したの。
『う、動いてるニャ』
（ど、どもんないでよ……）涙目。

ガサガサガサッ！
藪から飛び出して来たのは小さな男の子でした。
（へっ？）

『ニャ？』
「お、なんだお前？　こんな森で猫って珍しいな」
ホッとした私は腰を抜かしたようにその場に座り込んじゃいました。
「あなたは、誰？」
『……』
「おぉ、可愛い黒猫じゃん？　餌でも探してるのか？」
「ううん、迷子になっちゃったの」
「そっか、お腹空いてるのか？　なんか食べれるもんあったかな……」
そう言って腰に吊るした革袋を漁っている男の子。
（この子、言葉通じないよ？）
『……』
「これなら食べられるかな？　ほら肉の燻製だよ。食べな」
出された肉をつい咥えてしまった私……　だってお腹空いてたんだもん。
はぅ、おいしいわ。ついつい咀嚼して会話を忘れる私……
「そかそか、おいしいか。じゃぁな」
そう言って立ち去ろうとする男の子。
「ま、まってよー　モグモグ」
「バイバイーー」
笑顔で手を振ってくれるのは嬉しいんだけどね……
「ちょ……　ムシャムシャ」
そのまま藪の中に消えて言っちゃいました。
『って、追いかけるニャ』
だって、だって美味しくて、食べるのに夢中で身体が動かないんだもん……

森で出たった男の子

どうにか食べ終わると、さっきの男の子を探す事にしたわ。
だってこの世界に来て初めて人に出会ったのよ。なんの情報も持たない私達には貴重な存在なのよ。それに――優しい子だったしね。
――――あの燻製肉美味しかったなぁ……
にぱぁーと笑顔になる私。
『アスカは簡単に誘拐されそうだニャ……』
（……　さ、気を取り直して探すわよ）

森を彷徨う事数分、さっきの男の子はすぐに見つかったわ。
（案外早く見つかったわね）
『早く確保するニャ！』
（確保って……　まぁ、そうね……）

男の子は私達が走り寄る前に、すぐ気が付いてくれたわ。
さすがにこんな森に1人で来るだけあって音とか気配に敏感なのかもね？

「あ、さっきの黒猫じゃん？　追いかけて来たのか？」
「さっきはありがとう」
私は輝くばかりの笑顔でお礼を言ったわ。
やっぱり先ずは感謝の気持ちを伝えるのが先決だと思ったの。
「ん？　まだお腹空いてるのか？」
「ち、ちがうよぉ～。そ、そりゃお腹空いてるけどぉ……　じゃなくて、私迷子なのよ。森の外まで案内してくれるとお姉さん助かるんだけどなぁ」
『……あのニャ、アスカ』
（ちょっとクロは黙ってて、今この子と話ししてるから）

『……』
私がクロと無駄話をしていると、男の子はまた燻製肉を差し出してくれました。
気が付くと私は飛びついて咥えちゃったわ。
パクッ！　ムシャムシャモグモグハミハミ……
「ほんとにお腹空かしてるんだな。でもそれで最後だぞ。もう俺も手持ちが無いんだ」
「んと、モグ。だからね、ムシャ……　モグモグハミハミ」美味しいけど、涙目。
そしてまた「じゃぁな」と言って立ち去ろうとする男の子……
私は大急ぎで食べたわ。そりゃ目に涙を浮かべ、喉を詰まらせながら、咳き込んで大変だったんだからね……
でも、その甲斐あって、なんとか立ち去る前に食べ終わって、男の子の行く手を塞ぐように仁王立ちしたの。
「ん？　まだなんか用か？　ってか器用な2足立ちが出来るんだなぁ」
大股で2足立ちし両手を広げている私を、珍しそうにしげしげと見つめている。
私はちょっとドヤ顔に成ってたかも？　テヘ！
「ねぇ、私も連れて行ってくれない？」
「困ったなぁ、もう食べ物ないんだよ……」
「だからぁ、あなた私の話を聞いてる？　私は迷子なの。森の外、出来れば街とかまで案内して欲しいのよ？　わかる？」
男の子は困惑の表情に変わっていったわ。
「いや、そんなに鳴かれても、もう無いって……」
「鳴く？　私泣いてないよ？」
『だからニャ、言葉は通じニャいんだニャ、これが』
（はぁ、なにそれ、なんでそういう事を早く言わないの？）
『アスカが聞こうとしなかったニャよ』
（え、そ、そうだっけ……）

『ここは身振り手振りで伝えるしかないニャ』
（む、むつかしそうね……　でも頑張るわ！）

私は身振り手振りで必死で伝えたわ。男の子は不思議そうに私を見ていたの。

そりゃ当然よね。ジェスチャーする猫がなんて滅多にいないでしょうからね。

でも私は必死だったわ。2足立ちのまま、両前足を合わせてお辞儀したり、右前足を使って自分の顔を指差したり、男の子の顔を指差したり、遥か遠くを指差したりね。時には飛び跳ねたりもしたわよ。熊に襲われた時の様子を、両前足を大きく広げ、ガオォー（ニャォー）ってやったりね。最後には息切れして、肩でハァハァ（ニャァニャァ）してたけどね……

その甲斐むなしく男の子のセリフは私を奈落の底に突き落としたの。

「なにか言いたいって事はわかった。でも何を言いたいのか全然わかんない……」

バタッ！

私はその場に、うつ伏せに大の字で倒れたわよ。

男の子の村へ

『アスカはまったく才能ないニャ……』
（う、煩いわね。ほっといてよ……）
『仕方ないニャ。取って置きの方法教えるニャ』
（な、なによ取って置きの方法って？）
『にゃにゃにゃ。聞いて驚くニャよ？　それは――――人化の法ニャりよ』
（ジン、カノ、ホウ？）
『発音おかしいニャよ……　まぁいいニャ。人化の法って言うのはだニャァ、人間の姿に成る術だニャ！』
私は一瞬、目が点になったわ。今までの私の苦労はなんだったのよ……
ってかこの子は家で飼ってる時から私をよくからかってたのよね。思い出したら腹が立ってきたわ。
（――――そ、そんなのがあるなら、さっさと教えなさいよっ！）
『す、すぐ怒るニャりね、そんなんじゃお嫁に行けないニャよ？』
（うぅぅ……　いいわ、後でお風呂ね）
『ひぃっ！　そ、それは勘弁ニャ。悪かったニャ。許してニャァァァァ』
（いいから、さっさと教えなさい。お風呂の時間が長くなるわよ。ふふふっ）
泣き叫ぶクロに地の底から聞こえて来るような冷酷な声音で言ってやったのよ。

そんなやり取りをしていた私達の身体がフッと空中に浮いたの。
えっ？　っと思ったら男の子に抱き上げられていたわ。
男の子は私の顔を自分の眼前に持って言ってこう言ったの。

「おまえ、面白いなぁ。家(うち)に来ないか？」
私は思わずコクコクと頷いていたわ。
「やっぱ、おまえ人間の言葉が分かるんだな。すげーよ」
男の子は大はしゃぎで私を抱えたまま飛び跳ねて喜んでる。
そして私は男の子に抱かれたまま、家に行くことになったのよ。
でも。
（結果オーライだからってお風呂はやめないわよ）
ビシィッっとクロに言ってやったけどね。
とりあえず、何時までも泣き叫ぶクロは無視の方向で。

帰りの道中（森の中）で色々と男の子は私に教えてくれたの。
もちろん私は頷くだけだけどね。
例えば、男の子の名前はレオパルト。皆にはレオって呼ばれているらしいの。
年齢は１２歳。この近くの村に住んでるんですって。
森には毎日のように狩りに来るらしいんだけど。狙う獲物は魔獣のみ。でも最近は魔獣も減って来て、そろそろ他の森に行こうかと考えてるらしいの。
魔獣ってなに？　って聞きたいとこだけど、それはまた今度かな。
で、１２歳なのに、村では一番強くて、夢は世界一の冒険家になることなんですって。
夢が大きいっていいことよねぇ
『だれに言ってるにゃ？』
（う、煩いわねぇ……　独り言よ）

色々聞いているうちに森を抜けたみたい。
森の中は暗かったから分からなかったけど、もうすっかり夕方って感じ。
日も西（なのかな？）に傾いてて、空も群青色に染まってきてる。
森を抜けてから小一時間歩いたかしら、村らしきところに到着し

たわ。

「おや、レオお帰り。今日の森はどうだったね？」
「あら、レオお帰りー。なぁにその子猫は？」
「よぉレオ、今日は早いなぁ。魔獣はいたか？」
道行く人々がレオに話しかけてくる。レオもレオで、みんな愛想良く答えている。この子は村の人気者なのかも知れないわね。

そしてようやくレオの家に着いたの。
２階建ての、まぁまぁ大きなお家なのかな？　まぁどこのお家も似た様な大きさだけど。

「ただいまぁー　かあちゃん腹減ったぁー」
ドアを開けたとたんに、大きな声でレオが叫ぶの。
「おかえりー。今日は早かったのね」
家の奥から優しそうな女性の声が返ってきたわ。
「うん、面白い子猫見つけたからさ、連れて帰って来たんだ」
「あら、そうなの？　母さんにも見せて？」
そう言って綺麗な２０台後半から３０台前半の女性が奥の扉から出てきたわ。
１２歳の子持ちには見えないくらい綺麗な人よ。
そして私を見るなり、笑顔でこう言ったの。
「まぁ可愛い。お母さんにも抱かせて」
そう言って手を差し出す綺麗なお母さん。

その後お父さんも出てきて、私は散々弄ばれていたわ……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6206w/

黒猫になっちゃった！

2011年9月13日03時10分発行